

ひとしずくの森

盛りだくさんの行事で、行く秋の森を満喫！

一・森林の文化祭

九月に入り雨続きで急激に気温も下がっていましたが、束の間の夏を思わせる陽射しの中、第二回森林の文化祭が九月十九日開催され、体験者数で延べ八百人の親子が秋の一日を楽しみました。直前にコロナ感染防止特別集中期間が設定されイベントが延期されるなど開催が危ぶまれましたが、感染者数も落ち着き期間満了を受けて、体験者の感染防止に向け行事内容を見直し、徹底した対策を図っての開催となりました。

今回の体験は、冒険体験や陶芸、クラフトなど常設プログラムに加え、森のホームステイやクロモジの匂い袋づくり、ススキなどを使った習字大会など、秋の森を感じる内容となりました。人気の高い陶芸体験では早々と満員に。クラフト体験でも、ペンダントづくりに親子で挑戦。各々工夫を凝らした作品が出来上がりました。久しぶりに開催された冒険体験では、地上9mでの綱渡り体験に一日中歓声が上がり、習字大会や匂い袋づくりも百名を超える参加者で賑わいました。

昼食の前後には、アトラクションとして中津川の民話を基にした紙芝居とオカリナコンサートが催され、透き通るような秋空にオカリナの音が吸い込まれていきました。

コロナ禍で飲食の提供ができない状況や、久々の晴天が重なったこともあり、以前のような来場者数は望めないところですが、外出を我慢してきた親子



などの参加者は閉園時間ギリギリまで秋の一日を楽しんでいました。

二・第百十四回森林の学校

十月十日は、晴天の下、第百十四回森林の学校を開校しました。当日は夏を思わせるような気温の中、親子三組と常連さん九名が森に飛び出して秋を探し、拾ったどんぐりでヤジロベエなどを作りながら秋の一日を楽しんで過ごしました。

紅葉し始めたばかりの源流の森にも、実りの季節がやってきました。クリやドングリに加え、ツノハシバミ、ブナの実、アキグミやアケビ、山ブドウなどたくさんさんの森の恵みを探してもらおうと言うものです。

そうした森の恵みに活かされている動物や虫たちもまた、冬に備えて一生懸命生きています。参加者たちは班ごとに森に入り、草笛を吹きながら芋虫や二ホンミツバチの巣の様子



を見て回りました。朽ちた木の隙間に巣を作ったミツバチたちは、スズメバチに備えて入口で一生懸命羽を震わせていました。また、共育の森ではクマがスギの皮を剥いだ跡を直接手で触ってその跡を確かめました。その後も鈴生りのアキグミやヤマボウシの実などを見て回りました。午後からは拾ったどんぐりでヤジロベエやコマを作って遊びました。刃物に慣れない子供たちもいて、指導に当たったインタープリターの皆さんは丁寧な説明と細心の注意で参加者をサポートしてくれました。お陰様でケガをする子供も無く、思

い思いの作品ができて満足のいく活動となりました。

今後も森林の学校は季節ごとの森を広く紹介しながら、誰もが楽しく森に入っていけるお手伝いを心掛けていきます。



三・第二回森林のようちえん

五月に第一回を好評のうちに開催し、その後コロナの影響で順延になっていた第二回を十月二四日に開催しました。

前日までの霰交じりの冷雨に森林散策が危ぶまれたのですが、当日は久しぶりの晴れ間で気温も上がり、まぶしい紅葉の中、九組二六人のお親子が飛び出していきました。森の秋を探す間も、蝶やバッタが飛び回り、カエルやカナヘビも出てきて大興奮。ロッジでは拾った葉っぱで思い出のシオリやステンドグラスを作りました。その後は、森の遊園地に挑戦しました。最初はおっかなびっくりだった子供達も、次第にスラックラインやカーゴネットをすいすい渡れるようになり、子供達の上達ぶりにお父さん・お母さんは「すごい。」を連発。美しい紅葉と秋空の下楽しい時間が過ぎていきました。次年度も楽しさ全開の企画で親子の冒険をお待ちしています。



館内クイズ

好評のうちに終了！

源流の森には「置賜の森林」と「森林と人々の暮らし」の二つの展示室があります。内容は自然や野生動物植物から森林や林業の役割、それらの資源を活用してきた飯豊町や置賜の歴史・文化が展示されています。展示方法もお子さんが楽しめるものから、大人も納得の解説まで幅広く用意されています。源流の森では、この展示を使って雨の日など野外での体験ができない時でも来館者が楽しめるよう館内クイズを提供しています。



内容は、十の問題を館内の展示に沿って回答していくもので、全問正解者には記念品を差し上げます。今季開園時から始めた館内クイズの利用者は七十二人となりました。(感謝!)体験された皆さんは、森の生き物や木の特性などに理解を深めながら楽しい時間を過ごし、最後に豪華(?)なプレゼントにニコリでした。今期は終了となりましたが、来期もプレゼントを拡充し、森林や置賜の暮らしをもっと知ってもらい、楽しんでもらえるよう磨きをかけていきたいと考えています。

所長イッシーのネホダレ

「ちはやぶる」

稲刈りも終盤、空には赤トンボ、足元の虫の音も微かになってきました。中津川の森も次第に色づいて、一年で一番華やいだ装いになる時です。

古から日本人は紅葉を愛で、歌や絵画でその感動を残そうとしてきました。中でも、冒頭の在原業平の和歌ですが、小生ずつと「韓紅」は小学唱歌「もみじ」に出てくる錦織だと思ってきました。が、先日、河北町の紅花資料館で本物を見て愕然。それは高価な紅花をふんだんに使った染物だったのです。わずかにオレンジ色を帯びた深い紅色の絹織物は、平安貴族でも身に着けられる人は極わずかだったはず。そんな貴重な布をまとったような森の姿が見られる日々はとても短く、中津川はあつという間に白い雪に埋め尽くされてしまいます。今だけの景色を一人でも多くの人に見てもらいたいです。

(ネホダレとは、置賜で寝言のこと。)

